



プ
ウ
フ
嬢

フニエルが二十一歳になった年、彼女の家には一匹の美しい、たいそう美しい猫が迎えられた。その名はプッフ嬢である。仔猫はどれも環境の変化を苦手とするというが、プッフ嬢は初めてフニエルの家へ連れられてきたときから堂々たる香箱座りで眠り、すぐに自分がこの家の主人であることを理解した。時折彼女は遊びのさなか、フニエルの腕だの指先だのを、鋭い歯や爪で攻撃した。前足の爪を食い込ませてしつかりとフニエルの腕を抱きしめ、尖った牙で齧りつきながら、両足ですばやく蹴りまくることもあった。そんなときフニエルは、彼女がこの貴婦人然としたいでたちの下に猛獣の気性を秘めていることを思つて、うつとりせずにはいられなかった。じつさい、プッフ嬢の美しさは、間違いなくロココの世界のものである。それでも、ブーシェやグルーズの絵でさえ、プッフ嬢から発せられる光のうちの最も端っここの部分が、少しだけ見え隠れするくらいといった感じだった。焦茶色の耳から首のあたりまでは、ふわふわとした長い毛に沿つて、僅かに重色を思わせるミルクティ色から白へと移り変わり、その音楽的なグラデーションは波打つように、もう一度背中から尻にかけてゆつたりと繰り返されていく。眼は信じられないほど繊細なブルー、鼻先はベビー・ピンク、柔らかい唇のあたりもうつすらピンク色で、長いまつ毛が眼のふちから広がっていた。そのすばらしい毛並みのために、彼女の身体の表面や輪郭はどこかぼやけて見える。絹糸よりも細い毛の一本一本がそれぞれに光を反射させるので、現実が上手くピントを合わせられていないのだ。それに、あまりに柔ら

かく空気をたつぷり含んでいるものだから、そっと触れただけでは、まるで何にも触れていないかのよう。そしてあとから、ゆつくりと手を包み込むようにして、上品な体温が伝わってくる。それは花の近くに寄ったとき、その芳香が風に柔らかく刻印されて広がってくるさまに似ていた。

プッフ嬢は日ごとに大きくなった。この毛むくじゃらの小獣が不自由なく転げまわることができるよう、部屋にも廊下にも階段にも隅々まで掃除機がかけられ、ごみごみした日用品は片付けられ、家はみるみるうちに綺麗になった。自分が世界で最も不幸であると信じ込んでいる母親のビヤリナンナは、初めのうちこそ「私はどうせ猫のお世話係ですよ」などと言ってフニエルに激しい嫌悪感を抱かせたけれど、それも数ヶ月のあいだのこと、まもなくこの貴婦人の虜となった。その証拠に、毎日丁寧に特殊な櫛を通して彼女の毛並みを整え、絶えず抜けつづけ生え替わりつづける毛を丹念に手入れするのだった。その甲斐あってか、冬になるとプッフ嬢は大いに毛吹き、その毛によって首の周りには立派な白い襟巻を、尻には巨大なバツスルを拵えるようになった。とりわけ、首の周りに一段高く垂れ下がった真白い襟を丁寧に櫛で梳かしてやると、ぐるりの長さが驚くほどびったりと揃うのだった。こうなるともはや彼女は、裸のまま十九世紀の美をも手にしているというわけだ。フニエルはそんなプッフ嬢の姿を見て、ああ、ヴィクトリア朝の仕立て屋たちは、きつとすべての女に猫であつてほしかったんだわと

思った。

フニエルを驚かせるのは、プッフ嬢の美しさばかりではなかった。フニエルはプッフ嬢の使うトイレに、ふつうは犬のそれに使われる吸水シートを敷き、そのうえへ、紙でできた猫用の模造砂を入れておく。するとプッフ嬢は、おしっこだの糞だのをトイレに出したあと、かならずそのうえへ模造砂をかけ、さらにシートを使って、出したものをそっと包んでおくのだった。そして排泄を済ませたよろこびのままに、家じゅうを猛スピードで駆けまわるのだ。

プッフ嬢の出したものを片付けるとき、フニエルはいつも白いシートの包みを開けながら、これが一種の贈りものであることを深く噛み締めた。ときにプッフ嬢の糞からは、白檀の香りがすることさえあった。

フニエルは糞を片付けながらいつも言った。

「おお、プッフ嬢、なんて素敵なおウソなの。ニューヨーク近代美術館の館長が来るわ。ボンビドウ・センターの館長も来るはずよ、ぜひ、なんとしても、この立派な作品を私たちの美術館に収蔵させてくださいって。でも、そんなことになったら……毎日大勢の人がうちへ押しかけることになるわ。プッフ嬢をだれにも見せたくないの。そんな騒ぎになる前に、私がいただくわね」

勿論、いまや若い女が、「だわ」とか「なのよ」などと言うことはほとんどない。けれども、プウ

フ嬢があまりにエレガントであるために、彼女を前にすると、自然とそんな言葉遣いが口をついて出るのである。フニエルは、とうとう自分の話し言葉を見つけたわと思った。彼女は相当なシャイだった。話し言葉というのは、どうもやりにくい。どう話しても、不自然な感じがする。たとえ流れるような会話がどこかにあったとしても、それが流れるような会話である時点で、フニエルにとつては言いようもなく不気味で不自然だ。常にいくばくかの演技をしなければ、誰も会話することなどできない。その演技というのは、フニエルがフニエル役をするという事、それから言葉を使うことだ。言葉を使うことは、おおよそ生きていることとは関係がない。関係がないのに、言葉を使って、生きていることの中の何かを装っている。言葉で話すと、爪先立ちで前のめりに走っているようで、ふわふわする。それでもかろうじて、口からはみだした言葉の終わりを固め、着地させるための重力みたいなものを授けてくれるのが、「だわ」とか「なのよ」、あるいは「です」「ます」なのだということを、フニエルは発見したのである。いまやフニエルは、これらが禁じられた場で、いったいどのように喋り終えたらよいのかわからなかった。彼女の生れ育った処には、これといった方言もない。決まったかたちの話尾で固めてしまわなければ、言い終えたのかまだ続くのかわからない言葉の始まりかけみたいなものが、いつまでも齒の裏にこびりついて落ち着きなくしている。そしてだらしなく開いたままの唇は、大氣中に浮遊する言葉の始まりかけをくわえこむ。すると、齒の裏で待っていた

言葉の始まりかけと、きたならしく溶けあう。一緒くたになつて、一層わからなくなる。ぶつ切りにされた言葉の本体が、まだ身体のかなかにどれくらい残っているのか。すべてずるずる引き出してしまふと死ぬのかもしれない。それは待機、永遠の待機だ。そんなのつて、とフニエルは、毛繕いの最中に呑み込んだ抜け毛を見事なフェルト状にして包み込んでみせているプッフ嬢の糞を見つめながら呟いた、そんなのつて、まだ出るのか、出し切ったのかわからないウンコを、ひたすら便器に座つてじつと待っているようなものなのよ。

さて、このように完璧な存在といえるプッフ嬢が、内気で神経質なフニエルに空気と時間の秘技を明かしはじめたのは、日夜繰り返し返される遊びのなかのことだった。

この気位の高い小獣は、まだエリンギのように小さな姿をしていた頃から、フニエルのことを自分の幼い妹だと考えているらしかった。姉としての矜持のためか、フニエルには抱き抱えられることを嫌がり、ときには焦茶色の尻尾でフニエルの頭を撫でながら寝かしつけたし、なによりも毎日フニエルと遊びたがるのだった。彼女にしてみれば、優しい姉として、自分を慕う幼い妹と戯れてやるつもりなのかもしれない。フニエルのほうも、この美しく慈愛に満ちた姉の要求を断ることなどできなかった。そういうわけで、彼女たち姉妹は昼も夜も遊んだ。リビング・ルームで走りまわることもあれば、ベッドの上で転げまわることもあった。それも、プウ

フ嬢のほうから誘うのが常だった。彼女はリビング・ルームの隣に、すっぽりと収まって休むための籠やゴブラン織のクッション、鈴の入った毛糸玉、フニエルが「プチ・トリアノン」と呼ぶキャットタワーなどを置いた専用の部屋——いくなればブドワールを持っている。そして、フニエルが昼過ぎに起きてくるとその足元へ駆け寄り、彼女のほうを見上げながらさかんにこの部屋へ催促したし、食べるのが遅いフニエルがいつまでも食卓にいと、「ブルン」と繰り返し鳴きながら彼女の周りをうろつき、走り、前足でつついた。こうして姉妹は遊びの了解をとりつけるのだった。

フニエルが立ちあがると、もうプッフ嬢は眼を丸く見ひらいてその一挙一動を捉えている。フニエルはゆつくりと「プチ・トリアノン」の支柱の陰に隠れる。指を僅かにそこから出して、小刻みに床を叩く。叩く。叩く……。プッフ嬢はそこから十センチも離れていない場所にいるのに、すぐ飛びついてくるわけではない。むしろ跳ねるようにして、後方へ逃れる。そしてごくゆつくりと風いだ、しかし緊張した足取りで、フニエルの手を見つめたまま、遠くを歩きまわる。柔らかい足先で優しくかきわけ、空気を含んだ身体を擦りつけて、フニエルとのあいだの空間一面に張りめぐらされた時間をほぐしてゆく。フニエルは床を小刻みに叩く、叩きながら、自分を包み込む今、がぐにやりと飴細工になって伸びるのを感じる。プッフ嬢はフニエルの手から遠いところに身を落ち着ける。いつでも飛びだせるように、身体じゅうの毛を膨らませ

てフニエルの指先を見ている。お尻を左右にふりふりするあいだも、プウフ嬢の顔だけは動かない。フニエルはぐつぐつ煮立って柔らかく広がる今のなかに沈み込む。とろけた脳のふちがピリピリ泡立つ。そして急に、今がもとの長さに戻る！ プウフ嬢が指に飛びついてきたのだ。伸びていた時間、ふんの光が、いっぺんに集まってくる。眩しい。眼を細める。見るものすべてが、少し黄緑色になっている。プウフ嬢さえ少し黄緑色だ。プウフ嬢のこのリズム、ゆつくりと優雅に凜いでいたかと思えば、突然強く身を固めてきびしく暴れだすこのリズムはいったい何だろう？ このリズムに触れていると、時計の針がタ、タ、タ、と一定の速度で進み、あと十五分経てば十六時になりますなどという、これ以上ないほど確かに思える事実が、まったく信用ならないものになってしまう。過去、現在、未来という偉そうな一方通行のラインがぐにやりと歪んで伸びたり、一気に縮んでちよっぴり裏返しになったりする。猫のリズムは時間をおかしくしてしまうのだ。それはプウフ嬢に出会うまで、フニエルが経験したことのないリズムだった。フニエルはこのリズムを掴もうと考えた。つまり、自分もプウフ嬢と同じリズムで動くのだ。なぜって、プウフ嬢と同じリズムで動けるようになれば、プウフ嬢の論理、ひいては猫の論理を、ほかならぬ自分の身体で知ることができるかもしれないのだから。それにここには、とフニエルは直感した、人間の時間感覚で生きてきたせいで、つまり人間らしい歩きかた、食べかた、座りかた、眠りかたをおしつけられてきたせいでこれまで自分が知るよしもなかつ

た、空気や時間の秘密が隠されている。そう直感したときには、この未知の論理を知りたいという大きな欲望に抗うことはできなくなっていた。

初めはただの模倣でも、次第に何かのタガが外れて、少しずつ猫の論理に触れられるようになってくる。肝心なのは、人間だった頃のことなど忘れて、この麗しいけもの身のこなしをことごとん真似することだ。彼女はまず、風いだ動きから始めることにした。手はじめに、プーフ嬢のくるりと巻いた前足や、途方もないローテンポでありながらも静止することなく僅かな動きを保ちつづける身体の流れを、仕事へも行かずに毎日観察した。そして実際にプーフ嬢と遊ぶとき、フニエルはその足取りを思い浮かべながら、なるだけ足を上げず、ゆっくり、ゆっくりと空気の粘りをかきつけるように、爪先立ちで歩いた。彼女は自分自身を映写機にした。そして次の瞬間にはもう映写機でいるのをパッとやめ、プーフ嬢の身のこなしをそっくり映写する光そのものになろうとした。そのためには、プーフ嬢の姿を一度わかりやすい言葉に置き換えることさえ、最小限にとどめるのだった。そして、たとえ眼に見えないものであっても、感覚を妨げる原因になるものが自分のなかから何ひとつ沸き立つことがないように、注意深く無心になった。こんな修業を六ヶ月も七ヶ月もつづけるうち、彼女はある程度、プーフ嬢の動きを学びとることに成功したのである。彼女は、ゆっくりした動きほど、絶え間なく行うのが困難であることをしみじみ実感させられた。初めのうちは、おかしなふうに力が入りすぎて前

のめりに転びそうになったり、腹筋が攣ったり、あるいは柔らかな動きを意識するあまり足首の力が抜けてバランスを崩したりした。しかし執念深くフニエルはつづけた。やがて少しずつ、上手にできるようになると、空気というのは渦を巻く蜜の海で、重力はその甘やかな粘性を抱きとめようとする大地の慈愛ではないかという気がしてくるのだった。この幸福な黄金色のイメージは、たとえ単なる空想であつたとしても、フニエルを大きく勇気づけた。そうすると今度は、プッフ嬢が飛びつくときの、あの激しさを真似する段だ。ここでも、執拗な観察と実践がつづけられた。ただ激しく動くだけではないけない、うるさいのはいけない。無節操に力を爆発させるのではなく、もつと上質な、たとえばアルテミスのような狩人の品性が必要なのだ。なんといっても、これは単なる遊びではなく狩りを模した遊び、命を奪い奪われることの戯れなのだから。フニエルはここでも、蜜の海のイメージを応用した。つまり、蜜の海が風いでいるときがあるのならば、そこに針のような波が立つこともあるだろう——しかし、あくまでも気品を保つて。彼女がプッフ嬢とのあいだに広がったこの海を鋭く波打たせるイメージで激しく動くと、それがたとえほんの少しの身震いに過ぎないものであつてもプッフ嬢は跳びあがり、猛烈なよろこびを示して部屋じゅうを駆けまわつた。こんなふうにして、姉にして師であるプッフ嬢が少しずつ、しかし確かに応えてくれることがわかると、フニエルは自身の修業の上達を確信するのだった。

「もう二十代も半ばでしょう。この歳になって、結婚もせず、ずつとうちにいて、することといえは猫の真似なんて」

この頃になると、フニエルの動きは明らかに猫に近づきすぎていたので、ピヤリナンナやその夫のココンテロにとって、フニエルの存在は大きな気がかりの種になっていた。

「稼ぎのいい男でも見つけて結婚してしまえば、あとはなんとかなる。だからとにかく犯罪者にだけはならないでくれ」とココンテロは言った。彼は娘の前で一家の今後について話すとき、いつも一切がよそごとであるような、身軽な柔和さを見せるのだった。するとその横で、

「大学院にまで行かせてやったのに」とピヤリナンナはすすり泣いた。「私が行きたくても行けなかった大学院によ、誰がお金を出してやったと思っているの。フニエル、あなたはこんなに恵まれているんだよ、私とちがって。バレエだってピアノだって一流の先生を探して、高い月謝を払って習わせたのに。ドブに捨てたのと同じだよ。どうしてそう人を小馬鹿にしたような態度をとるの。私のしたかったことを、何でもすべてやらせてもらっているというのに」

「いや、まだ遅くないよ。君が行きたいなら、今からでも大学院に行けばいいさ」

ココンテロが真面目な顔でピヤリナンナのほうに向きなおると、彼女はたちまち機嫌を悪くして黙り込んだ。

「あんたがこれまで女に使い込んだお金のうち、幾らかでもうちに入れてくれていれば、私だっ



ヴォイニツチ手稿を読む

ヴォイニッチ手稿は、稀覯書の商人であるヴィルフリド・ヴォイニッチによって一九一二年にイタリアで発見されて以来、おそらく誰ひとりとして満足に読めた試しのない奇書で、これまでに錬金術師ゲオルグ・パレシユ、アタナシウス・キルヒャー、「驚異の部屋」で知られるルドルフ二世などの手を渡り歩いてきたらしい。ヴォイニッチがこの書物を手にしたときにはすでに、「これはルドルフ二世が六〇〇ダカットで買い取った解読不能の書です。読み解けるのは、比類なき知性のキルヒャーさまを措いてほかにごさいません」という内容の、キルヒャーに宛てた手紙が挟まっていたという。そこにはまた、「一六六五年八月十九日（一六六六年との説もある）」との日付と「クロンランドのヨアンネス・マルクス・マルチ」との名が記されていた。

この書物の第一の特徴は、ほとんどすべてのページをうめつくす未知の言語と、謎めいた歪な挿絵である。びっしりと綴られた文字はこれまであらゆる言語学者たちの解読を無慈悲に退けてきたし、現存するページの三分の二程度を占める植物の絵は、すくなくとも現代の地球ではほとんど見られない形状を示している。歪んだ体型の女たちがあらわれたかと思えば、彼女らは何の感情も読み取れない忘我の面持ちで、エジプトの香水瓶をぶつきらばうにしたような作りの管だの泉だのに裸身を浸しているし、突然ホロスコープや宇宙図を思わせる絵がページいっぱいに登場したかと思えば、やはりおびただしい数の全裸の女たちが無表情でその周りを

取り囲んでいる。するとそのうち、何を描いたのかさえよくわからないような図形的機構の絵まで登場してきて、見れば見るほど謎は深まるばかりなのである。

私はこの書物をわけもなく愛していて、もし生涯のバイブルを一冊だけ選びなさいと言われてたなら、ヴォイニッチ手稿を選ぶかもしれない。何が書かれているのかもよくわからないのにこれほどまでに惹かれるというのは、奇蹟のようなことだからだ（いや、何が書かれているのかわからないからこそ、というべきなのだろうか）。

けれども今回は、未読の書であるこのヴォイニッチ手稿を読んでみようと思う。一緒に読んでくださるかたがいるならば、イェール大学図書館の公式アーカイヴ・サイトをはじめとするいくつかのサイトで本手稿の全ページを誰もが見られるようになっていたので、わざわざ何かを買う必要はないということ、それから私には言語学の才がないから、言語学的「解説」を期待しないでほしいということをお知らせしておこう。また、私はこれから語ることについて、ほとんど何ひとつ専門的に語る資格をもっていないので、ことによるとおかしな説明があ

i. Yale University Library 「Cipher Manuscript」 <https://collections.library.yale.edu/catalog/2002046>（最終閲覧：二〇二四年十一月十七日）。本稿の最後のページにQRコードを掲載した。

るかもしれないが、できれば大目に見ていただきたい。

ヴォイニッチ手稿を言語学的に「解読」できないならば、もう野放図に好き勝手に言うしかなくなるかという、かならずしもそういうわけではない。そもそもこの謎の言語を読み解いた人などいないのだから、その点では他の全員と条件は同じはずだ。ヴォイニッチ手稿を読むならば、頼れる力はアナロジーくらいのものでだろう。すなわち自然魔術の伝統に則り、「似ている」ということを足掛かりにするのである。



謎に包まれた書物のことを考えるとき、その正体を知るために人びとがまず求めるのは、制作年代や地域にかかわる情報だろう。ヴォイニッチ手稿も例外ではなく、これまで数え切れないほどの研究者や言語学・植物学の専門家が、この手稿の記された時代や作者、地域を特定しようとする分析を重ねてきた。しかし二〇二四年現在に至るまで、そのはっきりとした答えは明らかになっていない。

二〇一一年にはアリゾナ大学で、ヴォイニッチ手稿に用いられている羊皮紙の調査が行われた。その結果、この紙が作られたのは一四〇四年から一四三八年であるとわかったらしい。けれども使われた紙の制作年代が判明したところで、ヴォイニッチ手稿自体がそれからだいぶあとなって書かれただとか、ひどく長い年月をかけて制作されたとかいう仮説を否定する証拠もない。結局は、「その年代よりもあとに書かれたものである」ということを示す程度の参考資料にしかならないのだ。同時に、ルドルフ二世が一五八二年にこの書物を入手していることから、少なくともそれよりは前に書かれているという情報もある。これらを総合すると、一四〇四年から一五八二年までのどこかで書かれたと考えることができそうだ。ただ、これでは百年以上の開きができてしまう。もう少し年代を絞ることはできないだろうか。

この書物が書かれた時代の特定を困難なものにする大きな理由として、描かれている女たちがどれもほとんど裸であることがしばしば指摘されてきた。すなわち、服飾から時代や文化圏を推測することが難しいのだという。しかし果してそうだろうか。

たとえば手稿のちょうど中盤あたりには、黄道十二宮のシンボル（のように見えるもの）に、それぞれ一ページずつの奇妙な図が与えられたセクションがある。このセクションの中央には共通して、今日でもよく知られる魚や乙女や天秤の絵が描かれている。その周囲を、手に持った大きな星を掲げ、装飾を施された五右衛門風呂のような奇妙な装置に下半身を浸した女たち

が、放射状に取り囲んでいる。そしてここでは、なぜか山羊座めいた図(70v、71r——この記号はそれぞれのページに割り振られた通し番号で、文末に記したイェール大学のサイトでも照らし合わせることができる)と牡羊座めいた図(71v)のページのなかで、女性たちが衣服を着ているのである。

注目したいのは、その奇妙に歪んだ体形、大きな帽子やヴェール、そしてかろうじて確認できるドレスの模様やシルエツトが、どこかルーカス・クラナーナハ(父)の絵画を彷彿とさせるということだ。たとえば、ザクセン選帝侯フリードリヒ三世に仕えたこの画家の代表作《ユディト》(一五三〇年頃)で生首を手に微笑む妖艶な女主人公の装いは、その大きな帽子と煉瓦色をした美しい模様入りのドレス、一種のコルセットでマークされたウエスト、そしてゆったりと肩を滑り落ちる豊かな髪に至るまで、先述した70v、71r、71vの女性たちと共通する。

さらに服飾品という観点からは、他にもいくつかのよく知られた作品との類似を指摘することができる。たとえばダ・ヴィンチによるイザベラ・デステの肖像(一四九九—一五〇〇年)において、文芸の庇護者として名高いこの女性が着ているストライプ模様のローブは、ヴォイニッチ手稿・71rのちょうど右上に位置する女性が着ているものにそっくりだ。あるいは、彼女のすぐ内側の層に描かれた女性の頭を覆うヴェールは、アンブロシウス・ベンソンによるアン・スタップフォードの肖像(一五三五年)が被っている白い被り物とよく似ている。また同

じく被り物に着目すると、 Γ_{Δ} や $\Gamma_{\Delta}\Gamma$ の外周に描かれた女性たちは、左右に張りだした構造の後ろへ長いヴェールを垂らした特徴的な私たちの装飾品を被っているが、これは主にテューダー朝の女性たちが被ったゲーブル・フードと呼ばれる一種のヘッドドレスに見える。それも、 Γ_{Δ} の外周右側に描かれた女性が被っている切妻型の被り物は、たとえばルーカス・ホレンバウトによる肖像画（一五二五年頃）のなかでアラゴンのカトリーヌが被っているような伝統的なゲーブル・フードとよく似ている一方、 Γ_{Δ} の外周左側に描かれた女性が被っているならかな形状の被り物が、カトリーヌに次ぐヘンリー八世の妃であるアン・ブーリンによってフランスから持ち込まれたフレンチ・フード（有名な作者不詳の肖像画でも、彼女はこれを被っている）に似ているのはおもしろい。ここには、一五〇〇年代前半のイタリア半島からイングランドに至るまでの女性画を彩ったヨーロッパじゅうの装いが、華やかに勢揃いしているように見えるのだ。

これらは、ヴォイニッチ手稿の作者が生きた時代・文化圏をある程度示しているといつていだろう。加えて、ここで見た $\Gamma_{\Delta}\Gamma$ 、 $\Gamma_{\Delta}\Gamma_{\Delta}$ はほかのページとタッチが少し違うように見え、手稿が複数人で描かれた可能性をも示唆する。

それでも興味深いことに、手稿の多くのページを通して描かれた裸体の女たちの身体つきに限っていえば、やはりクラナハが一等近いように見える。わけても、月と狩猟の女神ディア



フニエルリンカの風景

●マドモワゼル・サン・テット

頭部のない貴婦人。フニエルリリンカにおいて最もよく見られる形の貴婦人である。帽子が彼女たちを作る。したがって、風で帽子が飛ばされれば、彼女たちは頭部を失うのである。ところが彼女たちは楽観的な性質をもち、落ちている別の帽子を拾って被り、新たな頭部を獲得する。それもまた飛ばされれば、次の帽子を見つければよいだけのことだ。

